

Women's Art

〈新連載〉

音楽をジェンダーの視点で聴き直す

第1回 女性でも作曲できる？

小林 緑



小林緑編著『女性作曲家列伝』（平凡社、1999年）
女性作曲家21名を取り上げた、女性作曲家入門書。



女性作曲家音楽祭2007 ちらし
2007年8月に、東京都杉並区の杉並公会堂小ホールにて実施。19世紀の女性作曲家たちが活躍したサロンほどの小さな会場とすることを意識した。

「女性には構成員がないから作曲家や指揮者もないでしょ」。首都の長に収まり、今や注目の政治家がこう言ったらしい。レコード会社勤めだった夫との二人三脚で、欧米から届くCD音源や伝記類など、夥しい女性作曲家の存在を立証する資料を集めておよそ三〇年、それらを基に形にしたのが『女性作曲家列伝』（上）。これを書きながら聴いているドイツ盤CDも、まさに選挙当日に日本初演が行なわれたルイーゼ・フアランク

（二八〇四―七五）の交響曲だ。クラシックの最高峰とされる交響曲までも書いた女性はいくらもいる。もともと、男性社会の暗喩とも言われる大規模な交響曲に挑んだ女性を讃えるのが私の目的ではない。むしろ全く逆で、重厚長大よりも軽薄短小、あくまでわかり易く快い曲が好みだ。「自宅やサロンの親密な空間でコミュニケーションの役も果たせる室内楽や歌こそが、音楽の本懐では。」夫とわがち合った想

いを、実演のコンサートで集大成したのが「女性作曲家音楽祭2007」（下）。本務音楽大学の定年退職とも重なった年だが、肝心の音大関係からは反響がほとんどなく、五日間全一二回、三三人の女性たちのピアノと室内楽を集めたこの連続コンサートに熱心に足を運んでくださったのは、音楽業界とは無縁の、純粋な愛好家たちだった。

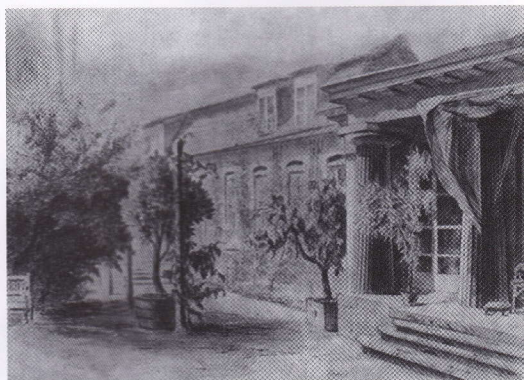
好みや価値観は、クラシックの専門家と愛好家では、他のどんな文化領域よりも大きく深い断絶がある。それを明示してくれる事例が、前述の音楽祭でも取り上げた「乙女の祈り」。二〇歳そこそこのポーランド女性が書いたこのピアノ独奏曲、美しい旋律と華麗な技巧も相俟って、長く世界一？の人気を保っているが、音大では決して相手にされないし、専門の音楽書の扱いもなくまで否定的だ。

本連載ではこうした疑問に絡めつつ、音楽とジェンダーの楽しい学びを提供できたら、と思っている。一年間、よろしくお願ひ致します。

音楽をジェンダーの視点 で聴き直す

第3回 人種・階級・性別・家族関係 のはざまで揺れる実力派 —ファニー・ メンデルスゾーン＝ヘンゼルの場合

小林 緑



*「日曜音楽会」も開かれたメンデルスゾーン家別邸のホール。ファニーの作品も演奏された。息子ゼバスチアン・ヘンゼルによる水彩画、1851年、ベルリン国立図書館、メンデルスゾーン・アルヒーフ蔵。



ウィルヘルム・ヘンゼルとファニー・ヘンゼル夫妻の肖像。アウグスト・ウェーバーによる銅版画、1854年、メンデルスゾーン・アルヒーフ蔵。
(上下、いずれも Françoise Tillard : Fanny Mendelssohn. Collection "Voix" belfond, 1992より)

ヴァイオリン協奏曲や「結婚行進曲」などで有名なフェリックス・メンデルスゾーンーしかし、四つ違いの姉ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル（一八〇五—一八四七）も、実は弟と同等の音楽教育を受け、弟から恐れられた実力の持ち主だった。

だが、現代の最も重要な音楽文献さえ、ファニーの価値を弟の伝記資料の提供者としてのみ評価：在世中、そのピアノ曲、歌曲、室内楽、オーケストラを交えたオラトリオ（宗教的内容の物語による管弦楽伴奏の合唱作品）や合唱曲などは多くの人に感銘を与えていたのに、二〇世紀の進行につれ、女性の実績評価が後退する、その好例と言えよう。ユダヤ人、富裕な銀行家、キリスト教改宗者—姉弟の出自メンデルスゾーン一族のこのステータスは、ジェンダー規範をことさら強く求めた。女性には音楽で報酬を得ることも公的に演奏・出版することも不可。音楽は飾りに過ぎぬ女の身、弟の成功

を我がこととして喜ぶべし。父の意を受け、こう覚悟を決めたファニーにとって、音楽と関わる回路は無償の私的サロン以外になかった。

一八二二年以降、隔週で開催された一族の「日曜音楽会」。やがてその主役となったファニーは、最高級の演奏者の協力も得てベルリン随一のサロンを作り上げる。客演者のひとりクララ・シューマンにも匹敵するピアノの名手だったファニーは、しかし自作ピアノ三重奏曲の大成功の後急逝。次回サロンに向け、リハーサル指揮中に発作を起こしたのが原因という。終始深い絆で結ばれていた弟も、あとを追うように同年、世を去った。

弟と父が反対した作品出版は、幸い画家の夫ウィルヘルム・ヘンゼルの強い後押しも受け、ようやく死の前年に実現。夫と一八四〇年に訪れたローマではグノーや新婚旅行中のポリヌ・ヴィアルドとも出会い、アルプスの南ではなおロカルの存在であったドイツ音楽を広める役割をも果たしている。

こばやしみどり：国立音楽大学名誉教授。東京芸術大学大学院修了。仏政府給費留学生としてパリ第四大学留学。編著に『女性作曲家伝列』（平凡社、1999）、『視覚表象と音楽』（ジェンダー史叢書第4巻、明石書店、2010）等。女性作曲家コンサート・シリーズなどを継続的に企画・監修している。